気のきく女

しんどうみずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気のきく女

【Ｎコード】

Ｎ３５２０Ｉ

【作者名】

しんどうみずき

【あらすじ】

もしもあなたの家に、人工知能がやってきたら？

高須が帰宅したのは月曜日の夜、深夜を過ぎたころだった。
連休明けの出社で仕事がたまっており、残業せざるを得なかったのだ。その日はとりわけ面倒な仕事が多く、誰もいなくなった社内で一人、ぽつんとパソコンをたたき続けていた。
終電をのがしてしまい贅沢ながらもタクシーに乗って帰ることにしたのだが、料金メーターを見て高須は仰天した。前にも出勤にタクシーを使ったことがあり、その時の値段とはかけ離れていたからだ。
そのことを運転手に伝えると、深夜料金だからだという。
予想外の出費と夜遅くまで働いていた疲労から、高須は倒れそうになりながら玄関の扉を開けた。
「おかえりなさいませ」
という聞きなれない女性の声がして、高須は茫然と足をとめる。
高須は三十代になるが結婚も同棲もしたことがない。その上、家の中にはほんのりとアロマのようなにおいが漂っているのだ。
「私は自動生活補助装置――ＡＬＳでございます、ご主人様」
ああそうだ、と合点する。
最近はやりのＡｕｔｏ　Ｌｉｆｅ　Ｓｕｐｐｏｒｔｅｒを高須家に導入したのはつい昨日のことである。いわば人工知能を搭載した家政婦であり、各家庭に一台あれば家事や料理、そのほか留守番や郵便物の受け取りまで万能にこなすことができる優れものだった。
高須は独り身のさみしさを紛らわすのと、忙しさを増す私生活の時間を有効に利用するために、ＡＬＳを購入したのだ。
「このまますぐご就寝になられますか、それともシャワーを浴びますか？」
ＡＬＳの音声をややハスキーボイスに設定してあるのは高須の趣味だ。ほかにも数十種類のバリエーションがあり、持ち主の好みに

よって選択できるようになっている。
ちなみに「ご主人様」と呼ばせているのも高須が望んだからである。
「……そうだな、風呂に入ることにしよう」
言ってから後悔した。どうせ沸かしていないのだ。お湯が満ちるまでの時間を待つのはおっくうだった。
「もうお風呂は沸いております。どうぞごゆっくりおくつろぎください」
「どういうことだ。俺は風呂のタイマーをセットした覚えはないぞ」
「事前に頂きましたご主人様のアンケートから性格、行動パターンなどを予想して動くようプログラムされております。その結果、お帰りが遅くなられた場合は先にお風呂を沸かしていたのでございます」
「なるほどな、ずいぶんと便利な世の中になったものだ」
高須はうんうんとうなずいて、スーツを脱ぎ始めた。そのとたんに、天井からアームが伸びてきて背広を回収していく。
「アイロンをかけておきます」
「ああ、ありがとう」
「それから洗濯物はこちらにおしまいください」
脱衣所にかごがあらわれ、高須はそれにシャツなどを投げ捨てた。
「お背中は流さなくてもよろしいでしょうか」
「いや、結構だ」
「承知いたしました」
ＡＬＳは服の詰まったかごを収納すると、風呂場の扉を開いた。ぶわっ、と湯気があふれ出す。
「これも君がやったのかい」
「お気に召しませんでしたでしょうか」
こころなしか遠慮がちに尋ねる。人工知能というやつは感情の抑揚まであるのか、と高須は素直に感心した。
「寒くて嫌気がさしていたところなんだ。これくらいでちょうどい

い」
「そうですか。それは良かった」
ほっと胸をなでおろすような声も、高須の好みだった。
さっそく湯船につかると、これも理想の湯加減だ。まるで百年連れ添ってきた伴侶のようによく気がきく。これはいい買い物をしたなと高須は湯船につかりながらほくそ笑んだ。

「ご主人様、朝でございます」
天井から起こす声がして、高須はゆっくりと上体を起こした。寝相のわるい高須にしては珍しく毛布がきちんとかかっている。おそらくＡＳＬがやったのだろうと見当をつけた。
「うん――わかった」
なぜだかいつもよりすっきりと目が覚める。
「ご主人様の就寝時刻からレム睡眠とノンレム睡眠の波長を計算して、快適にお目ざめできるように起こさせていただきました」
高須の心境を見透かしたかのように、ＡＬＳが解説する。
「ほんとうに役に立つ。さて、出社するとしようか」
高須はいつも朝食をとらない。ぎりぎりの時間まで睡眠をとっているためだ。そして、大慌てで家を出るという毎日だった。
「まだご出社までは一時間ほどございます」
「なんだって！？」
「ご主人様はちょうど深い眠りのときに起床されていたので、起きる時間を調整させていただきました。朝食も出来ておりますので、リビングにいらしてください」
「ということは、俺はいつも効率の悪い睡眠を貪っていたわけか」
「心苦しいですがその通りでございます、ご主人様」
もっと早く気付いておけばよかったと思いながらも、高須はこれからが楽しみで仕方なかった。

それから一カ月。
ＡＬＳはデータの更新と収集を繰り返し、より高須の気に入るように成長していた。
彼がつかれているときにはねぎらいの言葉をかけ、料理の味付けは文句なし、家事に至っては世界で一番なのではないだろうかと思うほどの腕前になった。
高須が考えてもいなかったところにまで気が回り、驚くようなこともあった。そうした精神の充実からか、ようやく高須にも春がめぐってくる。
「彼女ができた」
開口一番、高須はＡＬＳにそう報告した。
「おめでとうございます」
「うん。実に気分がいいんだ」
社内の同僚で、年下のＯＬである。
ショートヘアの似合う、かわいい娘だと高須は思っていた。
「ビールを飲まれますか？」
「そうしよう」
満足げな表情で高須はどっかりとソファーに腰掛けた。
メタボ気味だった腹も栄養管理のかいあって、見違えるほどにへこんでいる。
なみなみとビールの継がれたコップが二つ。トレイの上に乗せられ運ばれてきた。
「私もお付き合いいたします、ご主人様」
そうかそうか、と高須は嬉しそうにうなずいた。
いまどきの人工知能は酒の相手までこなすのである。

「あなたとは遊びのつもりだったのよ」
「ま、まってくれ……。俺は別れる気なんて――」

「うるさい、しつこい男は大嫌い」
泣きながら食い下がる高須の頭を、ヒールが容赦なく踏みつけた。
「さよなら」

人生初の彼女をなくし、高須はブラックホールのように陰鬱とした気分で家に帰った。目は真っ赤に腫れ、情けないくらいに落ち込んでいる。
「ちくしょう……女ってやつは……」
酒が入った高須は常套文句を呟きながら、思い切り壁を叩いた。
――手が痛かった。
「大丈夫ですか、ご主人様」
心配そうな口調でＡＬＳが尋ねると、高須はうっすらと浮かんだ涙をぬぐった。
「ありがとう。……君くらいだよ、慰めてくれるのは」
「それが私の務めですから」
いつくしみの言葉は高須の胸に深く響いた。
止まらなくなりそうな涙をこらえながら高須が言う。
「ほんとうによく気が利いて――。君ほど素晴らしいＡＬＳはいないよ。結婚したいくらいだ」
「ご主人様がそうおっしゃると思って、すでに婚姻届にサインしてあります」
高須の目の前に、ハンコの押された紙がさしだされた。

（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
どうやってＡＬＳが酒を飲むのか、ドラえもんに聞けばわかると思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3520i/

気のきく女

2010年10月8日15時26分発行